

日本語教育

田中 啓行

『日本語教育』178号の特集「日本語教育学の輪郭を描く」の中で、田中祐輔・川端祐一郎「『日本語教育』掲載論文の引用ネットワーク分析——日本語教育研究コミュニティの輪郭描写——」(pp.79-93)は、『日本語教育』1号から175号(1962年～2020年)の掲載論文とそれらの論文中で引用された文献を分析している。その結果、「近年、文献引用傾向の変化の速度が増しており、また実際の教育に関心を向けた研究の増加が一貫した傾向となっている」とし、この傾向は合理的であるとしながらも、研究の継承性や各種の研究成果、動向を参照して研究分野の発展性を追求することの重要性を指摘している。『日本語教育』に掲載された表現学関連の論文をみると、例えば、市江愛「モシは日本語条件文の理解を促進するのか—自己ペースの読文実験を用いた文処理過程から—」(178号、pp.94-107)は、自己ペース読文実験を行い、日本語母語話者の条件文の理解には影響を与えないモシが日本語学習者の文処理を促進することを示している。また、金井勇人「作文におけるア系の指示詞について—《非—共同的共有知識》という観点から—」(179号、pp.16-30)は、日本語学習者にとって習得が難しい、「発信者と受信者が共同の文脈を持たない(実世界において何も接点を持たない)状況において、それぞれ別の経験を通じて得た共有知識」を指すア系の指示詞の文法的な性質を「非—共同的共有知識」という概念を導入して分析し、日本語教育における扱いについて論じている。これらの論文は、日本語学などの知見をふまえて、他言語との比較や母語話者と日本語学習者のデータの分析を行い、日本語学習者の理解や習得の観点から新たな知見を提示するものといえるであろう。

また、早稲田大学日本語学会編『早稲田大学日本語学会設立60周年記念論文集 第1冊』『同 第2冊』(ひつじ書房)は「早稲田国語学・日本語学」の流れを受け継いだ学会の会員による論文集であるが、日本語教育に関しても論じられており、日本語教育における研究の継承性、発展性という面でも意義がある文献だと考えられる。

最後に、そのほかの動向に関する文献を2点紹介する。李在鎬編『データ科学×日本語教育』(ひつじ書房)は、コーパスをはじめとしたデータを用いた量的研究の方法論と音声、文字、語彙、文法、文章などを分析対象とした研究事例をまとめており、量的研究が抛って立つ理論と研究動向を知ることができる。また、森篤嗣「書き言葉におけるテル縮約形と日本語教育」(金澤裕之・川端元子・森篤嗣編『日本語の乱れか変化か これまでの日本語、これからの日本語』ひつじ書房、pp.199-217)は、書き言葉のコーパス2種によって、「～ている」の縮約形「～てる」の書き言葉における使用実態を調べ、学習項目として取り上げる必要性と注意点について論じており、いわゆる「逸脱」や言語変容を日本語教育でどう扱うかを示すものである。

本稿では筆者の力不足により数編を挙げるに留まった。方法論の変遷や言語変化などに目を配りながら、先人の研究を継承した成果が重ねられることが期待される。

(中央学院大学)